

氏名(本籍)	よし はら 吉原 ゆかり (福岡県)
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	博乙第2014号
学位授与年月日	平成16年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	江見水蔭翻案・川上音二郎一座上演『オセロ』(1903年)の研究
主査	筑波大学教授 博士(文学) 荒木正純
副査	筑波大学教授 名波弘彰
副査	筑波大学助教授 青柳悦子
副査	筑波大学講師 平石典子
副査	筑波大学教授 博士(文学) 大熊 榮

論文の内容の要旨

本論文は、日本が日清戦争の結果、台湾を領有してから約8年後の1903年に、硯友社系の小説家・江見水蔭が翻案し、川上音二郎一座が上演した翻案劇『オセロ』について、ポストコロニアル批評理論とジェンダー理論を研究枠とし、当時の日本の植民地支配イデオロギーや「人種」イデオロギー、さらに階級編成が、どのようにこの作品に反映しているかを考察したものである。翻案のもとになった作品は、イギリス・ルネサンス期の代表的劇作家シェイクスピアの悲劇『オセロ』で、これは、16世紀から17世紀にかけての地中海でおこったイスラム教とキリスト教の対立を背景とし、西洋社会の人種差別のために白人女性と非白人男性の結婚生活が不幸な結果に終わった様を描いたものであった。

論文構成は、以下のとおり。

序章

- 第1章 澎湖島の地政学
- 第2章 旅順虐殺事件と翻案『オセロ』
- 第3章 〈野蛮〉という見世物－第五回内国博覧会人類館事件と翻案『オセロ』
- 第4章 〈娯楽〉の領域
- 第5章 〈日本の生蕃〉－台湾の日本人セックス・ワーカーたち
- 第6章 〈生蕃〉オセロ

終章

補遺 1911年川上一座台湾巡業

参考文献／図版一覧

序章では、江見水蔭と川上音二郎の生涯と業績、さらに翻案『オセロ』成立の経緯について述べられ、先行研究の整理がおこなわれたあと、本論の問題設定がなされている。

第1章では、翻案作品の舞台とされる台湾・澎湖諸島は、13世紀以来、中国・スペイン・オランダ・日

本などのあいだで領有が争われてきた軍事的に重要な場所であるが、日本帝国主義を称揚する一面をもつ翻案『オセロ』が、澎湖諸島を舞台にしたことには、これらの事情が深く関与していると論じられている。

第2章では、翻案において、当時、西欧メディアが日本人をトルコ人同様の残酷な国民として報道していることを嘆くやりとりのあることに着目し、当時のアメリカの『ワールド』紙の旅順事件報道や、トルコ軍によるアルメニア人虐殺報道を検証したあと、川上一座が『川上音二郎戦地見聞日記』を上演し、戦闘場面の残虐行為を見せ物にしたことで大成功をおさめたことについて説明している。

第3章では、翻案『オセロ』の一場面、つまり、漢民族系台湾人が「生蕃」と呼ばれた台湾先住民に、日本内地人を観客として、台湾総督府を褒め称える歌を歌わせ、内地人から金銭をせしめようとする場面、さらに、大阪公演と第5回内国博覧会人類館事件の同時代性に着目し、翻案『オセロ』における台湾先住者の表象の分析がなされている。

第4章では、翻案『オセロ』上演や人類館事件の前史として、西欧で、日本や日本人が珍奇な見せ物として受けとめられていた「ロンドン日本人村」や「アールズコート日本人村」、さらに川上一座の欧米興行、さらに、1910年、日英博覧会でのアイヌ人や台湾先住民の「展示」をめぐる、イギリスと日本における当時の言説が論述・分析されている。

第5章では、翻案『オセロ』の登場人物で、シェイクスピアの『オセロ』では、ビアンカに相当する「琵琶香」に着目し、この人物は女形・山田九州男が演じ、熊本訛で台詞を話すように上演されたことから、この琵琶香の造型は、当時、台湾に多数渡航していた九州出身のセックス・ワーカーたちの姿を想起させたと分析し、その連想の妥当性を当時の言説から論証している。

第6章では、原作ではアフリカ出身のムーア人とされるオセロが、翻案では、被差別部落出身と噂される「新平民」室鷺郎にされていることの意味が検討されている。この鷺郎は、「人種の相違を新平民に持つて」いくとした江見水蔭のコンセプトに基づき造型されたとし、当時、杉浦重剛著『焚燗夢物語』や柳瀬勁介著『社会外の社会 穢多非人』で推奨されている、被差別部落民の海外、もしくは植民地への移住策と関連づけて論じられている。

終章では、この翻案『オセロ』は、被差別部落出身と噂される鷺郎が、大日本帝国の臣民として自己成型を果たしていく過程を描いたものというより、大日本帝国の臣民となることに破綻させられた過程を描いたものであり、さらに、植民地支配者と被支配者との間にあるべきものとして前提されている差異が崩壊することの恐怖を描いたものと結論づけている。

審 査 の 結 果 の 要 旨

著者はすでに、本論文に類以したつぎの研究論文を発表し、この分野では国際的な評価をえている：
“Japan as 'half-civilized': an Early Japanese Adaptation of Shakespeare's *The Merchant of Venice* and Japan's Construction of its National Image in the Late Nineteenth Century”（「半開」日本：シェイクスピア劇『ヴェニスの商人』の初期日本語翻案と19世紀後半における日本の国家像の構築）。この論文は、ケンブリッジ大学出版局より出版された論文集 *Performing Shakespeare in Japan* (2001) に収録されたものであり、シェイクスピア作『ヴェニスの商人』をチャールズ・ラムが書き直し、それを翻訳した井上勤の『人肉質入裁判』をもとに、宇田川文海が翻案した『何桜彼桜銭世中』をあつかい、この作品の分析をとおして、「国民文化」構築期にあった日本が導入・消費・奪有した英文学のイデオロギーのもつ意義を歴史化・文脈化したものである。本論文は、著者によるこの分野の研究のふたつ目の成果である。

前論文が、19世紀後半の日本のひとつの表象として『何桜彼桜銭世中』をあつかったのにたいし、本論文は、題名にあるように「1903年」に上演された川上音二郎一座による翻案劇『オセロ』が議論の対象と

なり、同時代におけるその表象性を追求するものである。この年代的観点からも、本論文は、前論文につづくものといえる。

本論文は、前論文とは比較にならないほど大部なものとなり、テキスト分析が中心であった前論文で手薄であった同時代資料の収集・分析が読者を圧倒せんばかりに増大し、それとテキストとの関連が論じられ、その論述・分析は見事で説得力に富んでいる。本論文は、こうした同時代の資料集としても一級のものであり、そこには独自に発掘した資料も多数含まれている。この点で、本論文は、この分野の先駆的な前論文にたいして、この分野の本格的な研究の開幕を記すものといえよう。このように、時代的に前後する翻案作品を並べて読んでみると、明治期がどのように推移し、また、その推移とともに翻案様式がどのように変化したかがよくわかる。と同時に、それが日本の西欧文化受容の進展と対応していることも判明する。ただ、このことは、本論文から読みとれることであって、本論文が目的とするのではない。

このような卓越した研究の本論文ではあるが、不満も若干ある。まず、本論文の論理構成が十分説得的ではないことや、テキストの分析が登場人物中心になされていることが指摘できる。テキスト性は、分析された事柄以上に豊かであるはずだが、その点が看過されている。また、注目されたのが、帝国主義の植民地主義にかかわる問題や人種的・階級的・性差別的差別問題であったために、分析結果としてはほぼ各章とも均質的な結論しかでてこないことなどが指摘でき、この翻案が作品としていかに優れているか、また、いかにおもしろいものであるかの評価ができず、時代の暗部だけに分析の光が当てられすぎていることなども残念な点である。さらに、帝国主義イデオロギー意識が、江見や川上をはじめ、当時の知識人または大衆にあったか、またあったとして、どのようにあったかの問題は残されている。

とはいえ、こうした不満は、まず、この優れた力作を前提として生じることであり、決して本論文の価値自体を否定するものではない。むしろ、本論文が示唆している翻案研究の可能性を認めるものであるといえよう。この分野の魅力を読者に十二分に提示した著者の貢献は大であり、さらに近年活発化しはじめた台湾研究にたいしても大いに貢献したといえる。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。